帯大研報，II-5 (1980)：169～184.

意味の概念への心的要因の導入 (II)

森　下　　盈
（帯広畜産大学英語学研究室）

1979年8月31日受理

The Introduction of Mental Factors into the Concept of Meaning (II)

By

Mitsuru MORISHITA

心理分析はそれ自体で一つの学問分野を成すが，言語の意味の諸問題は心的側面と無関係に存立し得ない。言語の意味は外的には聴覚と視覚の対象として物理現象のかたちをとるが，それの心的側面の方が言語の本質に関わっていると見なすのが妥当である。それ故，構造言語学的立場で，言語とは一つの社会集団の成員が伝達という相互交渉を行なう音声象徴であるとすることは，形式面に目を向け過ぎたものであり，意味を有する音声象徴が，生命体の証としての心的機能を具備した人間によって用いられることを無視してはならない。人間に心があるように，言語に意味があり，その意味の概念は心的要因との関わり無しでは把握できないものである。

本稿は，意味の種類，語の意味，隠喩，内話の事項をとり上げて，それらと心的側面の関係を考察の主軸とし，意味の概念を明らかにしようとするものである。

I. 心的場と意味

意味の心理性を解くに当たって，先ず心的場 (mental field) の概念を導入する。心的場は心理的実在 (psychological reality) によって構成され，それは個人における三種の潜在様態を含む。それらは，客観世界の把握様式の内在化，刺激にたいする反応様式の内在化，言語運用能力 (linguistic competence) の内在化である。意味はそれらの潜在様態のなかの投影の結果としてあらわれる。それを惹起するものは，外在物，言語形式，前意識，身体状況という刺激である。それらの刺激は絶えず心理的実在に影響を与えて，心的場の恒常性を不可能にしている。つまり，心理的実在の各内在化の様相は可変的である。このことは，個人における心的内容としての意味が同質の刺激を受けても時点的に差異を生ずることがあり得ることを示唆する。Sapir の著書には構造言語学の萌芽が見られはするが，彼は *Language* のなかで次のように述

べている。"Linguistic experience, both as expressed in standardized, written form and as tested in daily usage, indicates overwhelmingly that there is not, as a rule, the slightest difficulty in bringing the word to consciousness as a *psychological reality*"[1]. (イタリック体, 筆者)。このことばは言語運用能力が心理的実在として言語行為の一つの要因をなすことを裏付けている。言語の単位としての語が意識のなかに心理的実在として現われることにわずかの困難もないという彼の指摘は, 語のなかに個々の文法が宿っているという見方をとるならば, 心理的実在を言語の問題として扱うとき, 文法の内在化を認めるものである。

Ogden-Richards は他から殆ど非難のないままに踏襲されてきた意味の基本三角図を提示したが[2], その図で三角形の頂点を成すものは "Thought or Reference" である。それが "Symbol" を象徴し, "Referent" を指示するというとき, それらがどのように象徴し, 指示するかが問題となる。そこに心理的実在と心的場の概念が導入されるのである。思考は Bloomfield が言語学外のこととした個人の傾向授与要因 (predisposing factors)[3] をも含む心的場の全体性を基に成り立っている。そのことを考慮に入れなければ, 意味は客観的に考察され得ても, 個人の生きた意味を理解することができない。

心的場を構成する先述した三種の潜在様態は, その発達, 変遷において相互に依存し, 客観世界の把握は個人において, 刺激に対する反応というかたちで, 言語運用能力の内在化よりも, 通常, 先立すると見なされるが, 後者がその定着を特定言語のレベルで容認できる程度に具わった場合には, 言語獲得の様式が思考の様式に影響を与えるから, 結局三種のなかでの先立性を問うことは不必要である。心理的実在を, 客観世界の把握様式の内在化と言語運用能力の内在化の二つにすることも一見可能に思えるが, 刺激に対する反応様式の内在化は, より個人的側面で考えられており, それが個人の性癖を成し, 意味はそれに左右され, 言 (parole) の抽象体としての言語 (langue) の面でなく, 実際の言語行為では, その性癖は心的内容を決定する重要因子となる。

心的場のこの刺激に対する反応様式が個人の言語表現の意味の「色」を出すものである。それは発話する際にもそれを聴取する際にも関与する。言語行為におけるこのような面は, その付随性として, 体系的理解の困難さ故に分析が等閑に付されている。即ち, その面を考慮せずに言語の本筋を認識できるのである。草花においてある種類のものの葉の大きさ, 茎の太さなどが違っていても, それに関係なく種類が同定できるようなものである。このように, 実際の言語行為における意味の個人性 (individuality) は言語学的に関連がない (irrelevant) とされるが, それは意味研究における二分法としての認識的意味 (cognitive meaning) に対する喚情的意味 (emotive meaning) という区別で[4], 後者の範疇に含めることができる。「言」に対する「言語」のレベルで, 特定の喚情的意味をもつ語, 語群があるとき, 話者は心的場の要求を受けてそれを用いることにより, 聴者にその意味あいを理解させることができる。もし, 個

人により心的場の要求の仕方が違えば，異なった個人性を伝える表現をすることになるから，その心的場は個人の「色」を出すという点で，発話においては，言語学的に関連性のある (relevant) 意味を生じせしむ際の心的場の状況と同じ重要性をもつと言って差支えない。

言語学者のあいだで，言語の総意味 (total meaning) を「言語的意味」と「社会文化的意味」に分け，前者に「辞書的意味」と「文法的あるいは構造的意味」を含める区別がなされているが，社会文化的意味は主として一般意味論 (general semantics) の問題として取り扱われる。この種の意味は言語共同体のなかで，歴史的，社会的，文化的基盤のもとにかたち作られ，且つ変化を受けてきたものである。この意味も言語獲得の過程で，言語的意味と同様に心的場に刻印され，伝達行為参与者が共通に使用し，感得できるようになる。言語運用能力の内在化とはその種の意味の使用・理解の能力の内在化をも指す。

上述した認識的意味と喚情的意味の区別は言語の総意味を，より心理的側面から見た分け方である。また，後者の意味のなかには，特に一般意味論で述べられる感化的伝達 (affective communication)[5]の意味を含めることができよう。この感化的意味作用には意味の心理性が，認識的意味とは殊更異なる様式で，微妙にあらわれる。言語形式に忠実に則した意味はその認識的な意味作用に基づいて発話内容を悟ることができるが，その域にのみとどまっていては話者の意図するところがつかめないのが感化的伝達における意味の特殊性である。そこに捉えられるべき意味は別の言語表現をもって認識的意味のレベルで言い表わし得るものであるが，それは喚情性に大きな差を生む。この差は，言語形式に役割を果たさせることができるか否かという観点でのみ見るならば，重要なものでないとも言えよう。しかし，この場合では，表現形式が異なれば意味が異なるという考え方以上のものが要求される。話者の心理状況が感化的表現を用いざるを得なかった，あるいはそれを用いる方がよかったという発話意志を生み出したということは，聴者に対する特殊な心理的要請をもっていたことを示す。ここには生きた場における話者と聴者の相互関係が前者の心的場に微妙な作因として働いている事実がある。勿論，このようなことは感化的伝達においてのみ見られることではない。平叙文のかたちで命令を意味するか，命令文のかたちで命令を意味するか，仮定法を用いるか，直説法を用いるか，依頼の丁寧さの程度をどの表現形式で言い表わすかなどにも見られるのである。しかし，話者と聴者の心的相互関係が必ずそのように言語表現の形式に変化を引き起こすということではなく，また，ある特定の表現形式を話者が採ったからといって，必ず彼と聴者のあいだに感化的要素の存在が認められたり，特殊な心的相互関係が存在すると言えるものではない。

話者の立場としては，自身の心的内容がどのような類のものであれ，それを外的に知らしめるためには，表出に頼らざるを得ない。その一つのあらわれが彼の言語表現である。意味を形式にのせるときに，形式の認識的な面を第一義的に考える傾向があり，（事実，その面によって，言語の思想の伝達機能性という言語の一般的定義が受け容れられようが，）言語表現と

はあくまでも心的内容をその類を問わず外的に表わすことであるから，心的場の要請の一つのかたちとして認識的な面よりも喚情的な面が前面に押し出て，あるいは殆ど喚情的な面のみを以って，まさしくそれがために発話されることはある。特に原初的には，J. G. ヘルダーの「人間はすでに動物として言語をもっている。」[6]ということばに示されているように，言語形式の発声は mere feeling のそれと変わらないとも言えるが，体系として言語ができ上がった段階においても発話におけるそのような心的過程はあり得るのである。

伝達行為は，一つの見方として，その参与者のあいだでの認識的，且つ喚情的な心的場の交流であり，個体が様々の機能をもつ有機的組織によって生命を維持しているように，個人は他者とのあいだに心的場を通い合わせることによって他者との関係において存在せざるを得ない自己の維持をはかっている。幸いにも，心理的実在である客観世界の把握様式の内在化，刺激に対する反応様式の内在化は，各個人において通じ合うことのできる共通の構造を有し，言語運用能力の内在化もまた同質の社会的，文化的，地理的環境で育成されれば各個人が通じ合える共通の構造を有する。更に，言語運用能力が各個人に同様に内在化されれば，Sapir-Whorf の仮説[7]を待つまでもなく，外在世界の捉え方においても各個人が同等の心的場，あるいは少なくとも互に通じ合うことのできる共通の心的場が育成される助力を提供されることになる。このような個人における心的場の成り立ちのなかに，あるいはでき上がったその姿のなかに，認識的な様相ばかりでなく，喚情的な様相も作因し，また結果してゆく。だから，喚情的な面も，心的場のあらわれとしての単一の語，あるいは形式連鎖のなかに個人が感得できる共通の相を有すのである。どのような場合でも「喜」だけを感じ「怒」を感じないとか，他者が「喜」を感じているのを相手は彼が「怒」を感じていると判断することしか出来ないというのは普通の姿ではない。

また，心的場の共通の構造としては，単に個々の心的内容が問題となるばかりでなく，意識連鎖の様式も問題となろう。これの本源はある刺激に対して人間ならばどのような心的内容を抱くかという平均事実が先ずその説明の出発点となる。無論，このような反応性が絶対的なもの，または固定的なものと解釈されるべきではなく，そこに反応様式の柔軟性を認めた上で意識連鎖の成り立ちを考えるべきである。しかし，その柔軟性も人間の精神性の枠内で許容され得る性質のものでなければならない。だが，そのような条件をつけた上でも，言語形式の連鎖が無限の様式をもつように，その柔軟性は無限の意識連鎖の様式を生み出す。前者の連鎖様式には文法的であること (grammaticality) という制限が見られ，それは後者の連鎖様式が人間の精神性の枠内で許容されるものでなければならないことに対応している。

II. 意味並びにその一般性と不明瞭性

L. Antal は *Questions of Meaning* のなかで，意味の精神主義的 (mentalistic) な考え

方を批判して次のように述べている。"Meaning cannot be an image or a concept. If meaning were identical to these, it would not belong to language, and linguistics would exclude it from its proper field of study. Meaning is nothing more than a rule of word usage, and, being a rule, it can only be an abstract and fixed objective phenomenon"[8]. この意見は明らかに精神主義と対立するが，刺激反応説で言語行為を説明した行動主義 (behaviorism) の考え方とも異なる。ここでは「言」に対する「言語」のレベルで意味が説かれ，話者と聴者によってなされる現実の状況のもとでの言語行為における意味が考慮されていない。A. Shaff が用いた "sign-fetishism"[9]ということばはそのような意味の考え方にたいする危惧を表わすものであった。Antal が意味とは「抽象的固定的客観現象」でしかあり得ず，「語の用法規則」であると見なしたとき，それと心的内容（彼は "image", "concept" という語を用いているが，）との関係を互いに無関係の独立したものと，あるいは関係をもたせたくないと考えていると思われる。言語形式は起源的にも先ず心的内容を前提としているのであり，それは感嘆的 (interejectional) な発話にも擬声的 (onomatopoeic) な発話にも在る。まさしく，J. G. ヘルダーが「ここにいる多感な生物は激しい感情を何一つ内に閉じ込めることができず，不意打ちをくらわされたその最初の瞬間に，意図することなく，すべての感情を音によって表出せずにいられない。」[10]と述べる如くである。この見方で，Vygotsky の "...we may regard meaning as a phenomenon of thinking"[11]. ということばを認め得るのであり，更にそのような意味の現象形態を言語形式とすることができるのである。しかし，言語表現はあくまで音波，文字としての形式であり，それ自体は即物的に考えることのできるものである。それは，特定の異言語を習得せぬ者が，その言語の音声とか文字を聴いたり見たりしても，言語的意味としての心象を何ら喚起されることなく，単に聴覚，視覚を刺激されるだけのことがあることに見られる通りである。言語形式を現象形態とする意味とは心的なものであり，これは各個人が生々しく感じとるものであって，決して「抽象的固定的客観現象」とは言えない。ここにおける現象形態の移行は，外的に覚知不可能なものから言語的に心象を喚起するための物理的に覚知可能なものへのそれである。そして，このことは個々の現実的具体的脈絡のなかでなされることを知る必要があろう。

言語の意味が形式として現象形態をとる様式は，母国語の言語運用能力を獲得してからと異言語習得の過程とでは異なる。個人の思考は心的な整序的構成をかたち作るものであり，陳述，疑問，命令，願望，感嘆のいずれにしても，そこには自分の心的内容が収まった状態 (fixed state) がある。特定言語を既に獲得した者が異言語を習得する場合は，この心的に収まった状態の言語の構成素 (component) を身につけることが比較的主であるため，一般的に言って，部分から全体に至る過程が多く，母国語の言語運用能力の獲得における全体から部分へという一般的過程との相違が見られるのである。言語獲得の可能な時期の幼児が，たとえ単一

の語を発したとしても，そこには心的なまとまりがあり，少なくとも，反省的，学習的に異言語のことばを習得する者とは異なった，しかも自然な思考のまとまりがある。そのまとまりは既に母国語を獲得した者にとっては曖昧な (ambiguous) 収まり方かも知れない。だが，それにも拘らず，その曖昧性は，幼児にとっては時には幾つかの心的内容のばらつきをもっているにしても，それの発話を促す確固たるまとまりである。幼児にあってはこのようなことの反復が，心的場における刺激と反応との関係において，言語運用能力の幅を広げてゆく。発話の意識動力としての心的まとまりは単なる心的過程に終わるのではなく，言語形式との関わりにおいてはその言語規則の獲得という作業も合わせもつ。この獲得は，心的まとまりが意味と直結するように，mere feeling の産物としてなされ，形式連鎖の様式は一つの心的秩序のもとに潜在化されてゆくのである。

ところで，L. A. White は，人間以外の動物を含めた伝達行為における発達の段階を，(1) 有機体が音そのものに意味を感ずる段階，(2) その際の環境との相関関係で意味が音声に結合される段階，(3) 音声に意味を与える段階の三つに区別した[12]。人間の言語的段階は (3) であり，(1)，(2) の段階は人間以外の動物に見られるものである。また，(3) の段階は人間の抽象能力，あるいは範疇化 (categorization) の能力を要する実在の分節化の作業を指すものである。つまり，個々の具体物，物と物との関係，物の属性，その存在様式，心理映像を分節的に把握し，言語形式化して行く過程を指すものである。このことは語に限って考えられるべきものではなく，語が先立的に存在して語の連鎖から成る一つの発話はその後に位置するものであるということは必ずしも言えないから，ただ，刺激物に対して心的内容を喚起されるという面で考慮されるべき性質の事柄である。その場合の心的内容は単なる表象 (presentation) かも知れないし，判断 (judgement) あるいは情意 (feeling) かも知れない。たとえ判断形式のものでも情意形式のものでも一つの観念として把握され，分節化されることはあり得るのであり，これがいくつかの語の配列をとることもあろうし，単一の語をとることもあろう。原初的にそのどちらが先立するかを決定することは不可能であり，ただ明言できることはいくつかの語の配列のなかの構成素は反復的に利用され得る性質を有するものとして在るということである。即ち，そのような構成素は人間の抽象能力が生み出した一般性 (generality) をもつものとして機能する。(1)，(2) の段階は抽象能力と関係なく，音という物理的刺激に対する反応態度があればよく，その点に限って音が意味をもつと言えるのであり，意味が一般性を有する言語音とは異なるのである。たとえ，ある種の音にたいして時を違えて同じ反応を示したとしても，それは条件反射的な行動であって，その音を一般性を有するものとしての抽象的機能性を基に把握した結果ではない。つまり，その音には体系はなく，心理的に潜在化された人間の言語の規則性 (regularity) とは無縁である。

抽象能力による意味の一般化は恣意的であるから，それは語彙の面ではそれぞれの言語で

異なることがある。S. I. Hayakawa は抽象作用の過程に「抽象のはしご」(abstraction ladder)[13] の概念を導入したが，それは特定言語内での語の面における意味の一般化の恣意性を示すものであった。彼の説明では，例えば，ベッシー（ある１頭の牝牛），牝牛，家畜，農場資産，資産，富，という順序で抽象の過程の一般化が進んで行っていることが示されている。このように，より高い抽象のレベルに位する語は，より下位の抽象のレベルにある語を内包するかたちで抽象のはしごが成り立っている。語はそのような性質をもってこそ思想伝達機能性において便利さを示すのであるから，それを語に具備させ得る能力をもつ有機体のみが象徴体系を創造する資格があったとも言えよう。この抽象作用は，既に体系的にでき上がっている言語においても今後行なわれ得るものであり，言語の変化としては語彙面で一つにそのような抽象の過程が随時継続的に実現してきたことに見られるのである。

意味の一般化は対象に対して類似性 (analogy) を認識することを基礎としているが，それはいわゆる科学性に根拠を必ずしも置くものではなく，ある対象と他の対象とのあいだに知覚上の類似性を発見することがそれらに共通の言語形式を付与する根拠である。科学によってその訂正が行なわれ，認識基盤に変容を与えることも事実であるが，それにも拘らず，知覚上の類似性の意識が優って，科学的認識の正しさに基づいた対象にたいする言語形式の付与は人間の心理において承認されないことがあり得る。このことは素朴な段階における意味の一般化は知覚上の類似性にこそ強い根を有していることを窺わせるものであり，そのことの方が科学的認識による類似性の知覚に基づく意味の一般化よりも，言語形成のすがたを本質的に示してくれるとも言える。それ故，鯨が依然として魚の一種であると思えることは，言語的段階としては単に間違いであると片づけることができない。また，絵に描かれた「山」とか「コップ」を指して，通常，「それは山でない。」，「それはコップでない。」と言わないのも同じ見方で説明できよう。

語の意味が一般性を有していることは，先に述べたように，言語が便利に機能する大きな要因であるが，語がいわゆる不明瞭性 (vagueness) を有していることもそのように見なすことができる。しかし，前者の事実が言語行為において疑う余地なく便利さを示すのにたいして，後者の事実は，しばしば，伝達機能の点で混乱を引き起こすことがある。これは語の意味が明瞭な境界を定められていないためである。ある人は一つの自然情景を見て「森」と言うのにたいして，他の人は「林」と言うかも知れない。ある人が「あなたは中年だ。」と言われたのにたいして，彼が「私は中年でない。」と言う場合に，どちらも正しいことを言っているかも知れないのである。しかしながら，一つの対象にたいして，その表象する意味の不明瞭性の故に，「それは A である。」とも「それは B である。」とも言えることは，ときには混乱が生ずることはあっても，そのどちらを発しても正しい伝達が可能であることを示すのであるから，語の意味の不明瞭性は，他方において，便利さを有していると言えるのである。語の意味に一

般性を具備させることは，特定の物事にたいする断定の作業であるが，このように，その付随産物として，それが同時に不明瞭性を具えざるを得なかった事実もあるわけである。語の意味の一般性は，固有名詞を除いて，品詞を問わず，あらゆる語について言えることであるが，不明瞭性の問題はそうではない。ことばは，欲求あるいは必要性から生じたものであるから，意味の明瞭性が要求される場合は，限定的境界を定めることによってその作業が行なわれてきたが，それが特に要求されない場合や，人間の知覚作用を以てしてそれが不可能な場合は，その作業は行なわれていない。例えば，「中年」という語は，明瞭性が要求されるなら，その年幅を設定することにより問題は解決するが，この語が不明瞭性をもたざるを得ないのは，「森」や「林」がそうであるのと同様の面がある。それは認識的観点から述べられることであり，「中年」という語がただ単に年齢のことを指しておらず，身体の生理機能をも示唆し，「森」，「林」におけると同様に，明快な境界が設定されるだけの根拠を知覚的にもてないのである。

こういう事実は，意味の不明瞭性を有する語を話者が用いるときに，言語形式上断定的に，「それは A である。」と言ったとしても，「それは B かも知れない。」，あるいは，「それは B であると言った方がよいのかも知れない。」という心的事実を体験する可能性を示唆するし，一方，聴者はその発話を受け取るとき，「それが B である。」と思っていても，「それが A であると言われても分かる。」という心的事実を体験する可能性を示唆する。このような心的事実は類義語 (synonyms) が用いられるときにもあり得てよいように思われるが，その場合は，語の意味が不明瞭性をもつものではなく，定まった心的内容を喚起する性質のものであるから，通例，A と B のあいだを心理が行き交うことはない。類義語における選択的動揺は，不明瞭性を有する語を用いる際の心理と異なり，前者では公平に見て結局ある特定の語を使用すべきという判断があり，後者では用いざるを得ない語を用いて，それでも明瞭性をそれにもたせることができないという必然性を含むのである。類義語の選択における最終的な正しい結着の問題は，例えば，ある特定の文脈で "earth", "globe" のいづれを用いても意味は変わらないという見方以外の表現の喚情価値 (evocative value) までも含めた微妙な意味の差も考慮に入れられている。即ち，S. Ullmann の "Very few words are completely synonymous in the sense of being interchangeable in any context without the slightest alteration in odjective meaning, feeling-tone, or evocative value"[14]. ということばに従うものである。

III. 隠喩の意味と心的側面

意味の一般性をもつものとしての語にはまた，D. Bolinger の言う "something-like principle"[15] を心理背景として，隠喩 (metaphor) という言語事象がある。これには，起源的にはこの原則に基づいてでき上がった意味ではあるが，現在では殆どその隠喩的響きを失ったいわゆる死滅化した隠喩 (dead metaphor) もある。それに属するものは辞書に語の固有の一つ

の意味として定着している場合が多い。"the foot of a mountain" の "foot" とか "the neck of a bottle" の "neck" はその例である。このような用法を創りだした者は必ず最初にいるから，その者は視覚映像あるいは心象において対象物間に類似性，あるいは共通性を覚え，何度もその用法の "foot", "neck" を経験した者とは異なる新しい意識で隠喩を創り出したと言える。そして，これが更に先に述べた語における意味の一般性という力を具えて個々の対象に適用されるのである。

隠喩を作ることは，対象における類似性を知覚することを必要とする点では，意味としての一般性を有する語を新たに生み出すことと変わりがない。しかし，それは知覚映像，心象のレベルでそのことが言えるだけであり，隠喩においては特に移行される意味素性 (semantic feature) が問題となる。人間の足には肉も指もあるが，"the foot of a mountain" の "foot"にそのようなことは言えない。つまり，この例では，[Living] という意味素性から [Nonliving] という意味素性への移行が見られる。人間の "足" という語を無数の人々に適用したところで様々の足があるにしても，意味素性の移行は見られない。(但し，死んだ人間については特別の視点が要求される。) 隠喩の概念を最初に説明した Aristotle は，"Metapor consists in giving the thing a name that belongs to something else; the transference being either from genus to species, or from species to genus, or from species to species or on grounds of analogy"[16]. と述べたが，隠喩の種々の移行形態のなかに語の意味素性の概念を導入し，その移行性に隠喩の大きな特徴を認める必要がある。このように，隠喩においては対象にたいする類似性の把握が意味素性の差異を乗り越えており，それによって言語の意味のなかにその定着性を有したことは，言語の経済性 (economy) の観点から見れば，隠喩を作り出す事態の必然性を示すものであろう。この意味で，P. Valesio の "metaphar is not a figure of speech among the others, but a basic grammatical category"[17]. ということばに首肯することができる。

隠喩において，趣意 (tenor) と媒介 (vehicle)[13]の類似性とは，それが物質的根拠に求められるものでなく，語の意味における一般性が心的根拠に基づく類似性に求められたように，前者の場合も対象にたいする心理的映像が直接の実現要因である。しかし，両者において共に心的な根拠が見られるにしても，語の個々の意味の一般性については，特に具体語に見られるように，その心理性が物質を知覚したことにより生ずることもある。だが，その場合でも，先述したように，心的場の関わりで必ず把握されるものであるから，隠喩においても語の意味の一般性においても類似性を認める意識としては変わりが無いことになる。「趣意」の「媒介」による新たな範疇化はそのような性質のものである。その事実は客観的 (obiective) な隠喩ばかりでなく喚情的な隠喩についても言える[19]。"bitter taste" の "bitter" と "bitter experience" のそれは意識内容として体験する類似性に求められなければならないことは疑問の余地がない。隠喩はその構成において恣意的であり，死滅化した隠喩を既存事実として，新たに生み出

されてゆくから，ここにも意味を心的内容として捉えなければならない理由がある。心的内容の自由は一面で新たな隠喩の形成を促すのである。

語の意味の一般性の問題でも，隠喩における「趣意」と「媒介」の問題でも同様に「かみ合わないもの」を結合して捉えているということが言える。前者では，物質的側面と観念的側面のそれぞれの「かみ合わないもの」を結合して捉え，後者では前者の様相と同じもののものをもつと同時に意味素性の点で「かみ合わないもの」を結合して捉えている。この点で，後者の方が「かみ合わないもの」のあいだの開きが心理的に大きいと言えよう。しかし，このようなことは反省的，分析的にのみ述べられ得るだけで，人間の心的機能はその「かみ合わないもの」を極く自然にかみ合わせるのである。[Abstract] と [Concrete], [Living] と [Nonliving], [Human] と [Nonhuman] などに見られる意味素性の相違を心的にかみ合わせることによって隠喩は成立している。このかみ合わせは一定の脈絡か語群のなかでその成立が判明するものである。つまり，脈絡とか語群が意味素性の連結を知らしめる。同じことは擬人法 (personification) についても言える。例えば，"Frailty, thy name is woman". では，"thy" という語によって "Frailty" が [Abstract] から [Concrete] へ，更に [Living] へと意味素性の転換がなされていることが分かる。語も脈絡のなかで生きてくるものであるが，その意味は，たとえ死滅化した隠喩としてでも，既に固定した辞書項目を有するものであれば，いわゆる表象作用として心象を喚起することができるが，意味素性の生きてくる方式は実際の脈絡とか語群でそのようにあらわれるのではない。上の例文の "Frailty" は表象作用として一般的な心象を喚起する機能を有しているが，その意味での心象の喚起のされ方は意味素性の転換の事実とは異なるものである。一語として "Frailty" が上の例文にあらわれたのと同等の心的内容をもつためには，その語にたいして別のレベルの意識状態を要求されるわけである。それは "Frailty" が一定の脈絡で用いられたときに存するレベルの意識状態である。つまり，そのことが可能なためには表象作用の段階から判断作用の段階を意識内容としてもつことを要求されるが，通常，言語行動において，脈絡なしの単一の語は表象作用の段階の意識内容にとどまるものである。

隠喩と擬人法では意味素性の転換があるところに共通の性質があるが，後者には前者に見られるような辞書的意味を新たに表わすということはない。しかし，擬人法を用いるときの意識は，例えば，[Human] から [Nonhuman] へと意味素性の転換が行なわれている場合，その移行性を基盤とした特殊なものがある筈である。英語動詞のなかに，"suffer", "dream", "dwell" など有生 (Animate) 主語を要求するものがあるが，それにたいして非生 (Nonanimate) 主語を用いるときの意識は，異質なものを結びつける心的な衝突 (clash) を味わうのが普通である。しかしながら，このことは，不自然にあるいは困難さをもって擬人法ができ上がることを必ずしも意味していない。特にそれを用いることによって言語表現を連らぬこうと決めているときは，極く自然にそれが意識の流れにのるであろう。だが，それは言語表現の意味をすべ

て人間になぞらえる特異な形式であるから，それを受け取る側としては，理解は可能であるとしても，通例，一種の違和感を覚えるであろう。そうでなければ，彼は客観世界を正常に把握していないことを意味するのであるから，その違和感を覚えることは必要だとも言えるし，また一方，擬人法という表現形式を理解するに十分な心理的な幅も必要である。それは指示機能の幅を言語的レベルで心得えていることを示すものである。

心的衝突は擬人法ばかりでなく隠喩にもある。このことは，話者も聴者も「趣意」と「媒介」のあいだに二重の感情 (double feeling) を抱くことを意味する。文字通りに象徴されるものと比喩的に象徴されるものという二つの状況がその感情を誘起し，後者が前者に伴なう。二重の感情が隠喩を受け取る側に生じないときは，元来隠喩であったものが彼にはその表現の既存する固有の意味として内在化していることを示すか，彼が比喩的意味を理解できない，つまり，隠喩が用いられていることを悟れないことを示す。実際，初めて独創的な隠喩が用いられたり，「趣意」と「媒介」のあいだで，後者の性格特徴が不明なために，類似性の点で結びつかない隠喩が用いられたりすると，二重の感情をもつことが困難なことがある。その場合に，たとえ二重の感情がもたれたとしても，使用者の意図した比喩的意味と別の意味を感じとることがあろう。それ故，文字通りの意味が比喩的意味に用いられるときは，個人として感ずる「趣意」と「媒介」との類似性が基になってはならず，言語共同体で社会的，文化的に確立している「媒介」の性格特徴を基にしてそれが「趣意」に結びつくという事実がなければならない。この点で，「媒介」となり得るものは余りにも多くの性格特徴を有していたり，曖昧な性格特徴しかもち得ないものではいけない。隠喩を使用する側としては，通常，それを解釈する側のことを考慮に入れるから，両者間の心理的基盤が意識されているのが普通である。しかし，それにも常に程度の差があるし，新しい隠喩表現こそが意義をもつこともあり得る文学作品では，「趣意」と「媒介」の類似性には新奇のものがあるから，隠喩の理解では，文字通りに受け取ることのできる表現と異なり，心的衝突が避けられないことが多い。また，そこでは，言語運用能力とは別の解釈者の理解能力も問題となる。もっとも，死滅化した隠喩や単純な，あるいは「趣意」と「媒介」の類似性が判然とした隠喩ではその能力が問われることは稀ではある。

更に，隠喩の理解では釈義 (paraphrase) の問題がある。これは隠喩の比喩的意味を文字通りの意味に置き換えることである。だが，隠喩自体に既に釈義と同様の心的過程が存在しているのである。そのことについては，Kenneth Burke が次のように表現している。"Metaphor is a device for seeing something in terms of something else. ...A metaphor tells us something about one character considered from the point of view another character. And to consider A from the point of view of B is, of course, to use B as a perspective upon A"[20]. 例えばは，"plastron" は "the lower shell of a turtle" を意味することができ，それ

はもともと騎士の武具の "breastplate"（胸当て）を意味するものであったが，"plastron" が "the lower shell of a turtle" を意味すると釈義されるにおける心的過程は，"breastplate" の意味を「媒介」として "plastron"（亀の腹甲）という「趣意」を表わすにおける心的過程と同様の性質のものである。このように考えると，隠喩を釈義することは「釈義されたもの」を更に釈義することになる。隠喩に見られる釈義と同様の心的過程は，I. A, Richards が，"We can put varying sorts of limitations on 'express'; they give us different kinds of meaning—mere sense, sense and implications, feelings, the speaker's attitudes to whatever it is, to his audience, the speaker's confidence, and other things".[21] と指摘していることを考慮に入れなければならない独特且つ微妙な心理的根拠をもつものである。隠喩を釈義することは説明的に可能なだけで，それを為すことは隠喩のもつすべての効果を消失せしめざるを得ない。"plastron" が騎士の武具の「胸当て」を意味すると分かっている者が，亀を見て，他者にそれの腹甲のことを初めて "plastron" と言われたとき，あるいは自らが初めてそう呼んだときに感ぜられるその隠喩の効果は，亀の腹甲のことを "the lower shell of a turtle" と言うときの効果とは明らかに異質である。ここでの差は，前者に喚情的価値があるのに対して後者ではそれが欠如していること，つまり認識的意味が大勢を占めていることである。隠喩が一面において喚情的価値を有することは，それが詩や諺でよく用いられていることでも分かる。詩や諺はある意味で隠喩を用いることによって新たな響きをかもし出すものであるから，そこに釈義の妥当さ (adequacy) の可能性を見出すにしても，それは理論的可能性であり，それが仮りに行なわれたにしても，説明的とならざるを得ないことからすれば，隠喩の意味の破壊が行なわれることを前提としており，それの釈義は価値の転倒を要件とする無意味性を具えている。

IV. 内話と意味

内話 (inner speech) はそれ自体音声象徴となって外的に具現する外話 (external speech) と区別されるが，それは心的場に投影される内なる言語事象である。更に，それは言語運用能力の存在を前提としており，単に動物的段階における刺激にたいする反応という様式でのみ考慮することができないものである。特定言語の運用能力を潜在せしめられている者は，それをもって，しかもそのなかの文法構造をもって内話を行なう。それ故，内話は心的内容とも，外話における言語の意味とも密接に結びついている。つまり，それは思考の様相を帯びると同時に実際の言語表現の様相を帯びる。だが，内話はそれ自体独自の機能性を有し，思考と言語表現のあいだに揺れ動く別個の心的現象と認め，且つ独特の言語事象と認めなければならない。この意味で，思考は抑制された音声のない言語事象であると見なして，内話をそれと同一視することはできない。Vygotsky は上述のことを含意する次のような指摘をしている。"Inner speech is not the interior aspect of exernal speech—it is a function in itself. It still

remains speech, i. e., thought connected with words. But while in external speech thought is embodied in words, in inner speech words die as they bring forth thought. Inner speech is to a large extent thinking in pure meanings"[22].

内話の特徴の一つは，外話と異なり，思考主体の側でのみ考えられ得ることである。この点では，外話が心的内容との関わりで意味との直接性 (immediacy) を担うように，内話は思考主体の未だ自らの意識の範囲内で意味との直接性を担っており，それは，より言語的な意味の凝縮である。この凝縮のなかで強く前面に出るのが主たる意識内容であり，それは純粋な思考と違い，思考主体の側でのみ考えられ得るとは言え，言語規則にのっとって行なわれる。しかし，内話では相手に理解させる要求が感ぜられず，またそれは思考と言語表現のあいだに揺れ動くものであるから，そこにおける言語規則は，外話におけるように，十分なかたちをとらない。この点で，同じく思考主体の側でのみ考えられ得る独話 (soliloquy) とも異なる。独話では内話よりも言語規則に規制される面が強く，音韻規則にも統語規則にも，通常の伝達行為におけると同様に，相手に理解させるだけの十分さが見られるのが普通である。たとえ，独話でその十分さが無い場合でも，それはあるべきものとしての欠如であり，内話におけるその十分さの欠如はそれの本来的性質である。

このように，内話では文法性の省略があるが，意味の面ではその省略ではなく，それの凝縮と見られるべきである。思考の流れは外的な言語形式で表わされるときに，異質なものへの連結過程のうちに，それがかたちを変えるわけであるが，それをより直接的に言語化する未だ意識の枠のなかでの内話は意味の凝縮としてのかたちをとる。だが，内話におけるそのような意味の凝縮，また言語的意味との直接性にも拘らず，内話の意味そのものは，外話におけると同様に，心的内容に依らざるを得ない。その心的内容は，分節音素 (segmental phoneme) も超分節音素 (suprasegmental phoneme) も伴なうことはできないが，内話においても，陳述，疑問，命令，願望，感嘆のいずれの様相をもとり得る。内話では音素はそのように音声化されないが，内話が可能なためには，それを行なう者が特定言語の音素体系を言語規則の一部として潜在化せしめられていなければならないことは言うまでもない。

音素体系は外話のレベルで考察されたものであるが，内話がそれの潜在化を予め要求されるとしても，外話が内話に先立つものであるとは必ずしも言えないだろう。言語起源時において，意識のまとまりが，ある言語表現を欲求したときに，既に内話のレベルで音素が確立していたかも知れない。このことについては客観的な資料に基づくことはできないので確言は不可能である。ただ，特定言語の体系が大幅に確立し，それを言語使用者が内在化せしめられているときには，外話から内話へという順序が貫かれているとは言える。外話が内話に先立し，前者の構造が後者のそれを規制すると言えるのである。この意味で，内話の構造には外話の構造が反映され，また内話を経由して外話に到る場合は，後者の構造のうちに前者の構造が表わ

れることもあろう。しかし，そのような経由は必ずしも常にあるものでなく，必要なものでもない。だから，外話の構造が目的的に存するのにたいして，内話の構造は本来目的的に存しているものでないと言える。しかしながら，内話に外話の構造が反映されるからには，それが目的的に利用されることはあり得る。それは前意識が次意識を生む様式と異なり，意図的性質をもっている。思考が単なる意識の流れに任せられず，思考する努力があるときには，内話の意味が意識連鎖の構成のために機能する。このときにはその意味が思考活動の媒体となるのである。外話における意味が，独話においてであれ伝達行為においてであれ，心的内容を喚起するのと同様に，内話の意味作用は思考主体にたいして意識の連鎖を可能ならしめる。ここにも，外話が聴者の介在のもとにその意味が彼に心的内容を喚起せしめるように，思考主体の介在ののもとに心的内容としての意味が更に彼自身にたいして心的内容を喚起せしめるという言語行為の基本過程が生じている。

内話におけるこの過程は，凝縮された意味の機能性のもとに，聴者の存在を少なくとも現実的に前提とせぬ故に，自己本位的 (egocentric) になる可能性が強い。内話の意味の取捨選択も，音声を発する意識動力も必要としないから，容易に且つ自由に自己本位性が発現し得るのである。それ故，形式連鎖構成における文法性の意識は内話では外話におけるよりもずっと自動的と言えよう。また，内話の意味は，その主題を取り巻く状況が常に思考主体に知られているから，外話のそれよりもずっと断定的 (predicative) であると言える。このことは内話の自己本位性の裏付けでもある。自己本位性は内話がかたちを変えて外話に移行する場合，使用される語彙と文法の面での変容を受け得るのみならず，聴者が存在するときには，喚情価値を新たに付加する意識動力をも要求され，社会化された発話(socialized utterance) のなかに他者との関係性を帯び，そこに内話の意味の性質と外話のそれとの相違が生ずることになる。

内話の意味形成は，原初的段階を別にすれば，外話からの移行であるから，たとえ音声的表出を隠しているとは言え，それは外話におけると同様に，既述した三種の心理的実在の投影を受ける。それは，客観世界の把握様式の内在化の，また自己自身の関わりで考慮されるべき刺激にたいする反応様式の内在化の，且つ，いかに外的な象徴化をせぬとも，言語運用能力の影響を受けるのである。外話がこの三種の実在と先ずは根底的に不可分離であったように，内話は，その三種の潜在様式と同様に内なる姿として捉えられはするが，外話へ志向する別のレベルで，意識内の言語構造に支えられ，且つ心的機能・様相に支えられた外話の形式を内包する姿をとるのである。内話がこのように一つの心的事象として客観的に承認できることは外的言語形式の存在と心的機能の存在を承認するのと同等の条件で成立する。内話が何故に在るのか。他者との関係性の故か，あるいは思考せざるを得ない証なのか，あるいはまた言語を有した者にとっての必然的付随産物なのか。その問には，内話が必ずしも外話と直接的関係をもたなくてはならぬ不可避性は無く，また，本来，目的的なものでもない故，解答を与えることは

困難であろう。

注

1) *Language* (Harcourt, Brace and Company), p. 33.
2) *The Meaning of Meaning* (Routledge & Kegan Paul), p. 11.
3) *Language* (Henry Holt and Company), p. 23.
4) この二種の意味は学者によって様々の術語で呼ばれている。"cognitive" は, "scientific", "descriptive", "representative", "referential", "denotative", などと呼ばれ, "emotive" は, "expressive", "noncognitive", "connotative", などと呼ばれている。
5) Cf. S. I. Hayakawa, *Language in thought and Action* (George Allen and Unwin), pp. 84-86. J. C. Condon, JR., *Semantics and Communication* (Macmillan) pp. 92-95.
6) 「言語起源論」(法政大学出版局), 大阪大学ドイツ近代文学研究会訳, p. 2.
7) Cf. E. Sapir, *op. cit.*, pp. 34-5. B. L. Whorf, *Language, Thought and Reality* (The MIT Press) p. 212.
8) *Questions of Meaning* (Mouton), p. 91.
9) *Introduction to Semantics* (Pergamon Press) p. 225.
10) *Op. cit.*, p. 3.
11) *Thought and Language*, trans. by Eugenia Hanfmann & Gertrude Vaker, (The MIT Press), p. 120.
12) *The Origin and Nature of Speech* (Twentieth Century English), pp. 93-103.
13) *Op. cit.*, pp. 176-82.
14) *Semantics*, An Introduction to the Science of Meaning (Oxford Basil Blackwell)p. 142.
15) *Aspects of Language* (Harcourt Brace Javanovich), p. 208.
16) *Poetics*, trans. by Bywater, Chap. 21, 1457b.
17) *Alliteration and Grammar of Rhetoric* (Manuscript), p. 17.
18) Cf. I. A. Richards, *The Philosophy of Rhetoric* (New York-London) pp. 96ff. and 117.
19) Cf. S. Ullmann, *op. cit.*, *p.* 213.
20) *A Grammar of Motives* (Prentice-Hall), pp. 503-4.
21) *Interpretation in Teaching* (London). p. 135,
22) *Op. cit.*, p. 149.

Summary

The intent of this paper was to inquire into the relation between meaning and mind. For this study it dealt with kinds of meaning, the meaning of a word, metaphor and inner speech.

As the first step, the term "mental field" was used. It consists of three kinds of psychological reality in an individual: his internalized knowledge about external world, his internalized stimulus-response style, his internalized linguistic competence. They regulate the meaning of an utterance.

Linguistic meaning can be classified into two divisions: cognitive meaning and emotive meaning. Metaphor, apart from what is called dead meaphor, has the latter kind of meaning characteristically. And in metaphor we see the the transition from one semantic feature to another because of the change of the literal meaning into the figurative one. This transition is possible on the basis of perceptual, not material, similarity between one

thing and another. Word meaning also has its generality on this basis, which results from human faculty for abstraction. But, concerning word meaning, we do not see the shift from one semantic feature to another, and need not introduce "Tenor" and "Vehicle", which are necessary in considering metaphor.

In external speech both literal meaning and figurative meaning take the form of auditory or visual sign, while in inner speech the meaning stays in an individual's mind. However, it is supported by linguistic structure, too. And its meaning can be regarded as the condensation of the mearing of external speech. Although inner speech can be considered only on a thinker's side, it contains grammaticality and has a connection not only with cognitive meaning but with emotive meaning.